

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第9回 第3.2.4節～第3.5節

2018年5月1日

小田 勝

「3.2.4 助詞・副詞を受ける「なり」」の84頁、用例(7)～(10)の類例を追加する。

- ・ 尽きせぬ涙のしづくは、窓打つ雨よりもなり。(うたたね)

次例は複合辞を受けた例である。

- ・ [安城^{あんぜいらく}楽トイウ曲ヲ演奏シテ賀茂社ニ手向ケタノハ] この曲は、「都^{みやこ}安^{やす}し」といふ訓みのあるによりてなり。(文机談)

85頁「3.3 比況」については、「比況」という章を新設する予定なので(「第22章 比況」「第23章 修辭」を予定している)、そちらに回す。ただ、連用形の「ごと」について、86頁用例(8)～(10)は連用修飾の例だから、連用中止と思われる例をあげておく。

- ・ 当代(=冷泉帝)のかく位にかなひ給ひぬることを、[源氏ハ]思ひのごとうれしと(=思い通りデ、嬉シイト)思す。(源・滯標)

87頁「3.4 喚体句」。「なんて美しい花！」のような句型はあるだろうが、

- ・ 何ぞの押松(=人名)が、これほどの晴れに(=晴レガマシイ所デ)、南庭にうつぶしたる奇怪さよ。(承久記)

次例は、喚体句の内部が疑問文という特異な句型になっている。

- ・ など左府(=頼長)一人にしも矢に当たつて命を失ひけることよ。(保元)

次例は、修飾語を伴わない一語名詞の例。

- ・ 昔かな炒粉^{いりこ}かけとかせしことよ 袷^{あこめ}の袖に玉襪^{たまだすき}して(西行・聞書集)
- ・ 洞照(=登昭)といふいみじき相人ありけり。俊賢を見て「あはれ、目や(=アア、ナント良イ目ヨ)。あの目もちて相せばや」と言ひけり。(古事談抜書99)

「不思議かな。」(+訓抄7-23)、「あはれかな。」(六百番歌合)のような「形容動詞語幹+かな」という表現もある。次例は副助詞付き名詞の例。

- ・ またやもしと頼む心の今日さへよ今朝別れきと思ふものから(歌合239永福合)

次例は、88頁最終行の◆の類例である。

- ・ 春の花秋の月にも残りける心のはては雪の夕暮れ(秋篠月清集)
- ・ あはれ、なほこの君はめでたき君かな。(愚管抄)

・たぐひなく見ゆるは春のあけぼのに匂ふ桜の花ざかりかな (堀河百首)

このような「…は」句の下の「名詞 (+終助詞)」(下線部)は喚体句なのだろうか。このことは、例えば『枕草子』の冒頭を「春って曙よ！」(橋本治『桃尻語訳枕草子 上』1987年)と解釈できるかということに繋がる問題でもある(この訳は面白いかも知れないが、「…曙。」を喚体句と捉えている点で適切ではないと思う)。現代語の(役割語としての)女言葉、「私の着信音は、琴の音ではなくて、妙なる笛の音よ。」とか、男女の会話「妙なる笛の音だな。—そうね。妙なる笛の音よね。」といった「名詞+終助詞。」の句は、説明の文であろうから、87頁最終行の喚体句の定義は、このままでは不十分であると言わざるを得ないと思う。なお、「春は曙なり。」という構成の文の実例として、「峰の霞麓の花に鳥の声野山の春は夕なりけり」(歌合 239 永福合)をあげておく(第 13.2.2.3 節も参照)。

89 頁「3.4.1.1 形容詞語幹+の+名詞+や」。次例では、名詞が並立されている。

・あな、恐ろしの気色・事柄や。(保元・金刀比羅本)

用例(6)の類例、

・からくしてまどろみぬべき 暁にうらがなしげの鹿の鳴く音や (大弐三位集)

「3.4.2 擬喚述法(連体形終止)」の 91 頁。擬喚述法に推量の助動詞が立たないことは常識的な理解であるが、次のような例はどのようなのだろう。

・降る雪や降りまさるらんさ夜更けて籬の竹の一節折るなる (能因集)

・梓弓ひき野のつづら (=蔓草) 末つひに我が思ふ人に言のしげけむ (古今 702) <「しげけ」ハ「繁シ」ノ古イ未然形>

連体形終止文では、「解説」の用法(小池清治 1967)に言及すべきだった。

・「仏を紛れなく念じつとめ侍らんとて、深く籠もり侍るを、かかる仰せ言にて、まかり出で侍りにし」など [僧都ハ明石中宮ニ] 啓し給ふ。(源・手習)

・大臣 (=柏木ノ父) は、さ (=柏木ガ小侍従ト語り合ッテイルト) も知り給はず、「うち休みたる」と [柏木ガ] 人々して [父ニ] 申させ給へば、さ思して (源・柏木)

・「[柏木ガ] かかることをなむ [私=夕霧ニ] かすめし」と申し出でて、[源氏ノ] 御気色も見まはしかりけり。(源・柏木)

なお、土岐留美江 (2005) に、連体形終止文は発話者に当該の情報の絶対的優位性があることを示す(当該の情報が話し手側に属することを示す)形式であり、「詠嘆」も「解説」もそれが表面化した意味である、という興味深い指摘がある。

「3.5 已然形終止」、この現象をどう考えたらよいかは、よく分からない(なお、中世の用例を中心とした論考に、安田章 (1984) がある)。中古の用例を追加する。

- ・思しあなづりたりなどある人に、「今必ず聞こえめ。かう聞きつればうるさきま
で」など言ひたるに（出羽弁集・詞書）

本章について2点補足する。まず、「3.1.2 助動詞の相互承接順序」69頁の用例(1)は助動詞3語の承接例、(2)は5語の承接例である。4語の承接例、

- ・かの箱の中には、包みたる金^{かね}を一はた（＝一杯）入れられ-たり-ける-なり。（とは
ずがたり）

5語の承接例を追加する。

- ・人もかく沙汰す（＝噂スル）など思ひて〔高明ヲ〕召し返され-に-ける-な-めり。
（愚管抄）
- ・〔私ガ鎌倉ニ〕下りしほどの日記を、〔京ノ〕この人々の許へ遣はしたりしを〔題材ト
シテ歌ニ〕詠まれ-たり-ける-な-めり。（十六夜日記）

助動詞の最大承接数は、私の知る限り、用例(2)および上例の5語が最大で、いずれも末尾が「…けるなめり」になっている。

「3.2.1 指定辞」の81頁の用例(20)～(22)の類例をあげる。

- ・通房の母は、為平親王の子に三位にて右兵衛督憲^{のりさだ}定といふ人の娘なり。（愚管抄）
- ・奥州の住人に、文寿といふ鍛冶の作なり。（平治・古活字本）

新刊『読解のための古典文法教室』が刊行された。本書の第2講、例題〔4〕の解説について一言。4-5頁に「古典語の場合、動詞の終止形の形態から、活用の種類を見分ける方法はない。」と書いたのは、「現代語の場合」には、ある程度見分ける方法があるからである。すなわち、現代語の動詞の終止形は、上一段活用は必ず-iruで、下一段活用は必ず-eruで終わる。逆は真ならずであるが（例えば-iruで終わる「切る」や「入^{はい}」は五段）、対偶をとって、-iruまたは-eruで終わらない現代語の動詞は（カ変の「来る」とサ変の「する」を除き）必ず五段活用であるといえる。

これで「第3章」の補遺を終え、次回からは「第4章」に入る。

〔出典追加〕古事談抜書③『島原松平文庫蔵古事談抜書の研究』

〔引用文献追加〕小池清治 1967「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏物語を中心に—」『国文学言語と文芸』54／土岐留美江 2005「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4／安田章 1984「已然形終止」『国語国文』53-5